

第5回 利潤率の傾向的低下への資本の対応

その③ 金融化とその挫折

——架空資本・国家依存・軍事化へ向かう現代資本主義

(学習会レジュメを原稿化したもの)

はじめに

金融化とは何だったのか

現代資本主義を考える際、「金融化」という言葉は避けて通れないものとなっている。

株価の乱高下、巨大IT企業への投資熱、国債市場、量的緩和、仮想通貨、AIバブル、そしてリーマンショック以降の異常な低金利政策。これらは一見すると別々の現象のように見える。しかし、その根底には共通する構造が存在している。

それは、

資本主義が、生産部面だけでは十分な利潤を獲得できなくなり、金融的運動へと依存を深めている

という事態である。

ここで重要なのは、「金融化」を単なる投機の横行として理解しないことである。金融化は、資本主義の本質的矛盾——とりわけ利潤率低下と過剰資本の蓄積——から生じる歴史的運動形態である。

つまり金融化とは、

「本来、生産部面で利潤を実現できなくなった資本が、信用と期待を媒介として、“利潤らしきもの”を追求する運動」

なのである。

この章では、金融化を単なる市場現象としてではなく、資本主義の歴史的爛熟の表現として捉え直す。そして、その挫折としての金融恐慌、さらに現在進行しつつある新たな危機の芽について考察したい。

第一章

利潤率低下と過剰資本の形成

マルクスは『資本論』第三部において、資本主義が発展するほど利潤率は長期的に低下する傾向を持つことを論じた。

その理由は、競争の中で資本が絶えず技術革新と機械化を進めるからである。

資本は競争に勝つために、

- より高性能な機械
- 自動化設備
- AI・情報システム
- 巨大インフラ

を導入する。

しかし、マルクス経済学では、剰余価値を生み出す源泉はあくまで生きた労働である。

機械そのものは価値を移転するだけで、新しい価値を生み出さない。

そのため、

不変資本(機械・設備)に対して可変資本(労働力)の比率が低下するほど、利潤率は低下する傾向を持つ

ことになる。

もちろん、資本はこれに対抗する。

- 労働強度の引き上げ

- 長時間労働
- 非正規化
- 低賃金化
- グローバルな低賃金労働力の利用

などを通じて剰余価値率を高めようとする。

さらに国家も介入する。

- 法人税減税
- 消費税増税
- 公共投資
- 金融緩和
- 企業救済

などによって資本を支える。

しかし、これらは利潤率低下そのものを止めることはできない。

むしろ結果として、

投資先を失った膨大な資本＝過剰資本

が形成される。

この過剰資本こそが、金融化の出発点である。

第二章

銀行資本から金融資本へ

——信用制度の歴史的転化

資本主義の発展期において、銀行資本は基本的には産業資本を補助する存在であった。

銀行は遊休貨幣を集め、それを投資資金として企業に融資する。

この段階では、

銀行資本は、実体的価値増殖を補助する媒介装置

として機能していた。

銀行は、

- 支払いの効率化
- 資本回転の促進
- 投資規模の拡大

を可能にした。

つまり信用制度は、資本主義の発展にとって巨大な推進力だったのである。

しかし、この信用制度は同時に重大な矛盾を内包していた。

それは、

实体经济を超えて信用そのものが自己増殖する

という傾向である。

利潤率が低下し、生産的投資の魅力が弱まっても、信用そのものは拡張し続けることができる。

その結果、

将来の価値に対する請求権が、あたかも現在の資本であるかのように売買される

ようになる。

これがマルクスの言う「架空資本」である。

第三章

架空資本とは何か

架空資本とは、単なる「偽物の資本」という意味ではない。

それは、

将来生み出されるはずの剰余価値に対する請求権

である。

株式は将来配当への請求権であり、国債は将来税収への請求権であり、社債は将来利払いへの請求権である。

現代ではさらに、

- 住宅ローン
- 学費ローン
- 医療ローン
- サブプライムローン
- デリバティブ

なども証券化される。

ここで重要なのは、

これらはそれ自体では新たな価値を生み出していない

という点である。

しかし市場では、それらが独立した価値を持つかのように売買される。

ここに金融化の本質がある。

つまり、

将来価値への期待そのものが、現在の資本として流通する

のである。

マルクスはこれを「利子生み資本」のフェティシズムとして論じた。

本来は生産過程を経なければ価値は増殖しない。

しかし金融市場では、

貨幣が直接に貨幣を生む(G-G')

かのように見える。

これが金融資本主義の幻想である。

第四章

なぜ金融化は拡大したのか

金融化は偶然ではない。

それは過剰資本の必然的運動である。

生産的投資で十分な利潤を得られなくなった資本は、

- 株式市場
- 不動産市場
- 債券市場
- デリバティブ市場

へと流れ込む。

金融市場の魅力は明白である。

そこでは、

- 工場建設
- 労務管理
- 生産設備維持

などを必要とせず、

短期的に高収益を得られる可能性

がある。

さらに 1980 年代以降、

- 規制緩和
- 低金利政策
- 中央銀行の流動性供給

によって、信用拡張は加速した。

金融市場は、実体経済をはるかに超える速度で膨張していく。

しかしここで決定的なのは、

金融資産価格の上昇は、最終的には実体経済の利潤に拘束される

という点である。

どれほど株価が上昇しても、企業が現実に残余価値を生み出せなければ、その価格は維持できない。

金融化は、この矛盾を先送りしながら進行する。

第五章

金融恐慌はなぜ不可避なのか

金融化が進むほど、

- 実体経済の成長率
- 金融資産価格の成長率

の乖離は拡大する。

つまり、

実際に生み出される価値よりも、価値請求権の方が巨大になる

のである。

この状態は永続できない。

どこかで、

- 債務不履行
- 資産価格下落
- 信用不安

が発生すると、信用連鎖は逆回転を始める。

金融恐慌とは、

膨張した架空資本が、実体経済の価値水準へ暴力的に引き戻される過程

に他ならない。

つまり恐慌とは、「異常」ではない。

それは、

金融化そのものに内在する必然的帰結

なのである。

第六章

日本バブル、IT バブル、リーマンショック

1990 年代初頭の日本バブルは、典型的な資産インフレ型バブルだった。

土地と株式が永遠に上昇するような幻想のもとで、信用膨張が続いた。

しかし実体的生産性上昇を伴わない資産価格上昇は持続できず、崩壊した。

この崩壊は、日本経済を長期停滞へと引きずり込んだ。

続くIT バブルでは、「新経済」論が唱えられた。

インターネット革命そのものは現実だったが、

将来の成長期待が実体収益をはるかに先行した

ため、NASDAQ 市場は崩壊した。

しかしIT 基盤自体は残り、GAFAM型プラットフォーム資本主義の土台となった。

そして2008年のリーマンショックでは、金融化はついにシステム全体を覆った。

住宅ローンが証券化され、そのリスクが何重にも再証券化された。

その結果、

誰もリスクの所在を把握できない状態

が生まれた。

リーマン破綻によって信用連鎖は停止し、世界経済は急縮小した。

しかし重要なのは、

金融化そのものは終わらなかった

という点である。

むしろ国家と中央銀行による救済によって、金融化は延命された。

第七章

国家依存型金融化

リーマン後の資本主義は、

- 超低金利

- ゼロ金利
- 量的緩和
- 巨額財政支出

によって維持された。

これは、

金融化が国家依存型へと転化した

ことを意味する。

中央銀行は市場を支え続け、国家は国債発行で資本を支えた。

つまり現代の金融化は、

「市場の自律的運動」ではなく、国家による下支えを前提とした運動

なのである。

ここで国家は、

- 最終需要者
- 最終貸し手
- 最終保証人

として機能する。

しかしその結果、

財政赤字、国債膨張、金融市場依存

も拡大していく。

第八章

プライベートクレジット危機とは何か

現在問題化しつつあるプライベートクレジットは、この金融化の次段階である。

ここでは、

銀行融資そのものが投資商品化

されている。

本来、銀行規制によって抑制されたリスク融資が、ファンドを通じて再拡大しているのである。

この領域では、

- 将来利潤の前取り
- 非公開市場
- 流動性幻想

が重なっている。

特に危険なのは、

長期・非流動資産を、短期解約可能商品として販売している

点である。

これは「取り付け騒ぎ」を構造的に内蔵している。

しかも、銀行自身がファンドへ融資しているため、危機は再び銀行へ波及しうる。

つまり、

金融危機後の規制強化が、新たなシャドーバンキングを生み出した

のである。

第九章

AI・軍需・新たなバブル

現在の AI・半導体投資も、金融化された過剰資本の巨大な受け皿になっている。

AI 革命そのものは現実的契機を持つ。

しかし、

- 莫大な先行投資
- 将来利潤への過大期待
- 株価先行
- レント化

という点では、典型的金融化バブルでもある。

さらに重要なのは、

AI・半導体・宇宙・通信が軍事化と結びついている

ことである。

軍需経済は、国家が最終需要者であるため、資本にとって極めて安全な投資先となる。

ここで金融化は、

国家依存的・軍事依存的形態

へと転化していく。

おわりに

金融化は終わっていない

現在の資本主義は、

- 利潤率低下
- 過剰資本
- 金融化

- 国家依存
- 軍事化

が複合的に進行している段階にある。

金融化は失敗したのではない。

むしろ、

国家と軍事を媒介として、より大規模に延命されている

のである。

しかし、その不安定性は消えていない。

むしろ、

- 信用依存
- 国家債務依存
- 資産価格依存
- 軍事依存

を深めながら、危機はより巨大化・不可視化している。

現在の金融化とは、

資本主義が自律的な価値増殖能力を失いながら、信用と国家によって延命している状態

そのものなのである。